



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドストエフスキーとロシアにおける病の文化史 [全文の要約]
Author(s)	越野, 剛
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7041号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70608
Type	doctoral thesis
File Information	Go_Koshino_summary.pdf



要約

本研究は文化史の観点を導入した文学研究、文学作品を題材とした文化史研究という二つの側面を持つ。ドストエフスキーの創作において病気のテーマが重要であることは疑いえない。しかし先行研究は作家の言動や作品のテキストを通じて病気の「真実」を突き止めようとする病跡学的なアプローチが支配的であった。精神分析的な方法の多くはその延長線上に位置づけられる。ここでの文化史的な方法とはいわゆる言語論的転回をふまえたアプローチを念頭においており、テキストに記述された病気が実際には何であったかではなく、病気がどのように想像されイメージが構築されていったかに焦点をあてる。

文化史研究において扱いやすいのは通俗的・大衆的な文学作品である。ドストエフスキー（あるいはプーシキン）のような卓越した作家のテキストは必ずしも同時代の文化における典型的なイメージとは重ならない。しかし広い文脈から見ればそのテキストは後の時代の文化における言説や実践に大きな影響を与えており、その点で文化史的な関心の対象となりうる。もちろん同時代の他の作家の作品、ジャーナリズム、医学、フォークロアなどの資料と比較対照することにより、ドストエフスキーのテキストを位置づける作業も必要である。また病気に関する文化史的な研究のアプローチを文学研究に応用することにより、ドストエフスキー研究においてこれまで議論されてきた癲癇だけでなく、結核やコレラなどの多様な病気のイメージが作品において果たしている機能を分析することができる。

序章ではドストエフスキーの癲癇に関する同時代人の証言や先行研究を概観すると同時に、それらを一種の言説として分析して、ドストエフスキーの病について我々が抱くイメージがどのように形成されてきたかを考察した。第1には作家の病気が実際に何であったのか、癲癇だとしたらどのような種類の癲癇なのかという点について医学者を中心に多くの議論がなされてきた。第2にはドストエフスキーがいつ癲癇に罹病したのかという病歴をめぐる問題があり、様々なエピソード（父の死、革命運動、流刑）が病気と関係づけられていた。第3には癲癇と作家の創作との関係について、それをポジティブ（病気が作家に靈感を与えた）あるいはネガティブ（病気にも関わらず偉大な作品を残した）にとらえる対照的な見解が見受けられる。これらの議論の多くは作家の病気に関する「本質」や「事実」が何であったかを追求するという点で「病跡学」的な研究手法だといえる。一方で今日では病気のイメージや言説がどのように構築されてきたプロセスに焦点を合わせる「文化史」的なアプローチが盛んになっている。その転換点となったのはジェームズ・ライスの研究だといえる。ライスの論によればドストエフスキーにおける病気と創作は「弁証法」というべき関係にあり、執筆作業が病気を悪化させる一方で病気が創作を促すという両方の側面が存在するという。実生活における作家の身振りに目を向けると、癲癇という当時の医学では確固たる対処法が確立していなかった病気によって深刻な影響を受ける一方で、ドストエフスキー自身が病気のイメージを演出したり利用したりするような場合も見受けられる。またドストエフスキーの病気に関する描写はしばしばユーモアやアイロニーの距離をとともうものであり、それをライスは作家自身が用いた「反省」という言葉で論じている。

第1章では『白痴』を主に取り上げてそこに現れる結核のイメージについて考察する。「肺病 чахотка」という古い名称は「結核 туберкулез」に比べて文学的な含意が感じられる。早すぎる死を運命づけられた薄幸の美女や才能ある若者というロマン主義的なイメージはロシアにおいても広く受容された。とりわけアレクサンドル・デュマ・フィスの『椿姫』（1848年）およびジュゼッペ・ヴェルディによるオペラ版『椿姫（トラヴィアータ）』（1853年）は肺病やみの娼婦というステレオタイプを流通させた。ドストエフスキーの『白痴』のナスターシャは身体的には健康でありながら椿姫のイメージが意図的に重ねられている。一方で肺病による死を宣告された若者イッポリートはそのロマン主義的な悲劇の身振りが期待された効果を得られず、常に滑稽な役割を演じる羽目に陥る。このように病気に関するステレオタイプがパロディ的に借用されるようなケースはジェームズ・ライスのいう「反省」的なレトリックの一種として考えることができる。

第2章では催眠術（メスメリズム）を取り上げる。例えば明確な目的地もなくペテルブルグを彷徨い歩くラスコーリニコフのように、ドストエフスキーの登場人物はしばしば覚醒と夢見の狭間にあるような不安定な意識をさらけ出す。これは作家自身が癲癇発作の後に体験したという記憶の混乱や朦朧感覚とも共通する。催眠術の原型となったのは18世紀末のフランスで流行したメスメリズムとされる。ドストエフスキーはバルザックやオドエフスキーといったロマン主義期の文学作品を通じてだけでなく、ドイツロマン派の影響の強い医学・哲学の文献からもメスメリズムの知識を得ていた。第1節ではそのロシア文化における受容を概観し、第2節では初期短編『主婦』と後期長編『白痴』を中心にドストエフスキー作品における催眠術のモチーフを分析する。心霊術やオカルティズムとの接点が多いメスメリズムは、第1章で論じた結核のイメージと同じように、ロマン主義のパロディとして皮肉な距離をおいて描かれることが多い。一方で本人が自覚していない隠された欲望や潜在意識が催眠術的な語彙を用いて表現されており、不条理でありながらリアリティのあるドストエフスキー特有の迷宮のような人間の心理描写を可能にしている。

第3章では癲癇発作と類似した病理現象として悪魔憑きあるいはヒステリーを取り上げる。農村女性に多くみられた悪魔憑き（クリケーシャ）についてはウォロベツの社会史・文化史的な研究があり、本章の関心とも重なっている。ここでは真にデモーニッシュな現象、何らかの利益を得るために演じられた詐病、過酷な環境におかれた女性の病理現象（癲癇あるいはヒステリー）というクリケーシャについての三つの解釈を区分し、17世紀から19世紀までの通時的な時系列と農民・貴族・知識人という共時的な社会層の二つの断面に沿って異なる解釈が現れることを明らかにした。イスラムの預言者ムハンマドについても、キリスト教圏においてはその奇跡や神秘体験が詐欺師の芝居だとする意見が支配的だったが、19世紀に入ってからムハンマドが癲癇患者だという説明が説得力を帯びる。病跡学・医学的な解釈はイスラムやキリスト教という差異を超えて宗教指導者の比較を可能にした。真の宗教に対する偽の宗教（詐欺師）といった価値判断は後景に退くことになる。ドストエフスキーにとってこれらの問題は悪霊に憑かれた男がイエスによって癒されるという聖書に由来する信仰治療の物語と重なるがゆえに関心を抱かざるをえなかった。

第4章では19世紀になって初めて世界史に登場するコレラを扱う。死をもたらす伝染病としてのコレラはしばしば無神論や社会主義などの「伝染性」のある思想のメタファーとなった。革命によってヨーロッパが震撼させられた1830-31年や1848年がコレラの流行と重なったこともイメージの重複をうながした。第1節と2節ではプーシキン時代を中心にして文学やフォークロアにおいてコレラと民衆の暴力のイメージの複雑な重なりを解き明かす。第3節はドストエフスキーの『悪霊』論になっている。小説で描かれるコレラは言葉や思想が人間に影響を及ぼすことの意味を掘り下げる役割を果たしている。ステパン氏の「疑似コレラ *холерина*」がシュピングリン工場の「コレラ暴動」と対比されることによって、1840年代のペトラシェフスキーと1860年代のネチャーエフの世代の革命思想の連続性と断絶が俎上に載せられる。ドストエフスキー自身が40年代末に経験した政治的な病気をここで思い出すこともできるだろう。

第5章ではドストエフスキーの創作において謎めいたかたちで癲癇の描写に関与している火事のモチーフを取り上げる。『悪霊』のクライマックスで描かれるように火事もまた革命のメタファーではあるが、伝染病のように専ら否定的なイメージを担うだけではなく、ユートピアに向けて旧世界を浄化する炎として肯定的な意味合いでも用いられてきた。放火は弱者である民衆あるいは女性が反逆のために依拠する手段ともみなされる。急激な近代化と人口統計の進展によりドストエフスキーの時代にはロシア全土で火事が増えているというイメージが構築されていた。ドストエフスキーの作品ではこうした様々なイメージが人が火事を目の前にしたときに覚える病的興奮や癲癇発作後の朦朧状態（自動症）で行われる放火といった病理現象と重ね合わされている。

結核、コレラ、メスメリズムなど病気に関する言説やイメージの多くは西欧文化に由来するものである。結論ではドストエフスキーのテキストではそれらが対話性（受容と反発）と

いう大きな文脈に結びついていることを示した。その点で『白痴』のムイシキンが癲癇発作の前兆となる朦朧とした意識状態の中でロシアの独自性を論じるようになるのが示唆的である。